

尾崎翠『第七官界彷徨』における恋のかたち

山崎 葉奈

本論文では、尾崎翠の代表作『第七官界彷徨』を精読し、作中で繰り返し描かれる成就しない恋愛の意味を検討している。尾崎翠は昭和初期に幻想的な語りとコメディ性・アイロニーを交えながら独自の文学世界を築いた作家であり、『第七官界彷徨』はその代表作として位置づけられる。本作は現在においても読者や作り手の想像を喚起し、研究の対象としても関心を集め続けている。

本論文では、恋を成否で判断するのではなく、語り手町子の内側に生じる感覚の動きとして扱う読みを採用している。「第七官」という不確定な感覚に町子がこだわる理由を追うことで、恋の不成が結末の問題を超え、彼女の感覚世界と結びついていることが浮かび上がる。このアプローチは、作品全体の構造やモチーフを結びつけつつ、恋愛表現を感覚的次元から理解しようとするものである。